

# 西洋中世学会第6回大会

## ポスター報告・報告要旨（氏名の五十音順）

（6月22日（日）9:00～10:45、扶桑館1階105番教室）

### 1. 石田 隆太（筑波大学大学院）

#### トマス・アキナスにおける人間の魂が有する「絶対的なエッセ」（*esse absolutum*） について

本発表では、トマス初期の著作である『有と本質について』（*De ente et essentia*）第五章の一節を検討することを通じて、それ自体は「複合実体」とであるとされるが、自らの「魂」は「単純実体」とされる「人間」についてのいわば存在論的な位置付けを解明することが目指される。問題となる一節は訳本等においても解釈が別れる所であるため、そういった様々な解釈の吟味・検討を通じてより説得的な解釈を行うことが本発表の主眼である。

### 2. 沖 澄弘（東京芸術大学大学院）

#### コンラート・ヴィッツ作《聖クリストフォロス》——図像伝統における位置付け——

本報告は、15世紀第2四半期のパーゼルを拠点に活動した画家コンラート・ヴィッツによる板絵、《聖クリストフォロス》を考察対象とする。先行研究において本作の図像源泉は、やや無批判に、ヤン・ファン・エイクによる失われた板絵に求められて来た。報告者は、関連作品の整理と図像伝統の検討を通じて、通説の妥当性を再検証し、本作をより広いコンテクストのうちに位置づけることを試みる。

### 3. 櫻田 宗紀（東京大学大学院）

#### 教皇特使グイドの活動——リユーベックの事例を中心に——

サン・ロレンツォ・イン・ルチーナの司祭枢機卿グイドは、教皇クレメンス4世のもと、1265～1267年に特使活動を行った。本報告では、グイドがリユーベック滞在中に関わったバルト海沿岸における漂着物占取権(*Strandrecht*)の問題を中心に取り上げる。教皇庁と地方教会のコミュニケーションを担う教皇特使が地方の問題に関与した一事例を考察することによって、盛期中世の教皇特使の全体像を描く試みに寄与することを目指す。

#### 4. 加藤 政夫（学習院高等科）

##### 高等学校の世界史における西洋中世史——その可能性と限界——：事例④神聖ローマ帝国の扱い方

本報告では、高等学校の世界史の中で「西洋中世」や「西洋中世史」がどのように扱われ、位置づけられているのかを実際の授業の事例を通じて提示し、歴史研究と歴史教育の関係、歴史教育における「西洋中世」・「西洋中世史」の在り方などについて問題提起を行い、研究者のみならずと意見・情報の交換を行うことを目指す。

過去3回、同様のテーマで報告を行ってきたが、今回は高校の世界史のなかで神聖ローマ帝国を取り扱う際の問題点や留意点などについて問題提起を行い、意見や情報の交換を行う予定である。

#### 5. 北館 佳史（中央大学（非常勤））

##### 書簡史料から見る13世紀後半のポンティニー修道院と社会

本報告はシトー会ポンティニー修道院の書簡の書式集(BnF, lat. ms. 11384)を用いて13世紀後半の社会における修道院のあり方を検討することを目的とする。この書簡範例の集成は扱いの難しさもあって必ずしも十分に利用されてきていないが、この史料類型でしか残されない種類の情報も多く、修道院の外部世界とのコミュニケーションに注目した場合、証書系史料の補完的役割に留まらない可能性を有していると考えられる。

#### 6. 木村 容子（大阪市立大学研究員）

##### 無原罪の御宿りをめぐる説教師の選択——中世末期イタリアの説教日誌から——

本報告は中世末期イタリア諸都市を遍歴説教したフランシスコ会説教師の日誌に焦点をあてる(Foligno, Biblioteca comunale, Ms. C. 85)。無名の日誌説教師は、当時激しい論争が繰り広げられていた無原罪の御宿りの教義に関して、ある時は大胆に、またある時は慎重に行動している。発表では、教義をめぐる社会の動きといった外的要因と彼自身の聖母崇敬への思い入れといった内的要因が複雑に絡まり合って説教が形作られ、そして変化していくさまが浮かび上がるだろう。

#### 7. 久米 順子（東京外国語大学）

##### 中南米の西洋中世学：非西洋圏における取り組みの一例

非西洋圏における西洋中世学の取り組みの一例として、国際集会への参加や研究者たちとの個人的交流を通じて発表者がこれまでに知り得た中南米の動向を紹介したい。日本と比較すると、西洋中世学が成立した歴史的経緯や現在の社会のなかでの役割などに大きな相違点が見られる一方、研究成果の発表言語、業績評価システムや「国際化」への対応など共通する問題もある。日本の西洋中世学の位置付けを再確認し、より良い方向へ進んでいくために、こうした比較検討が役に立ち得るのではないかと考える。

## 8. 児矢野 あゆみ（國學院大學大学院）

### ヤコポ・ダ・ポントルモ《キリスト受難伝連作》（フィレンツェ郊外、ガルツツォ修道院中庭回廊フレスコ壁画、1523-25年）——十字架の道行きとの関連について——

ヤコポ・ダ・ポントルモ《キリスト受難伝連作》は、1523年から25年にかけてフィレンツェ、ガルツツォ修道院の中庭回廊装飾のために制作された。本連作を構成する五つの場面は回廊の各隅に配置され反時計回りに展開する。修道士らは回廊を巡ることによってキリストの受難を追体験し祈りを捧げていたと指摘されるが、これは十字架の道行き信仰との関連が考えられる。このことは、本連作が留一スタツィオーネーの役割を担っていることを示唆しているのではないだろうか。

## 9. 紺谷 由紀（東京大学大学院）

### 法文にみる後期ローマ帝国における宦官

4-6世紀は、去勢された男性である宦官が制度的な上昇を経、宮廷内において影響力を行使する時代として理解される。しかし、そのような宦官重用の一方、皇帝たちは勅令により帝国内での去勢を禁止していた。本報告ではそのような矛盾ともとれる「去勢禁止令」の再考を通じ、皇帝たちの宦官に対する認識の考察を試みる。尚、本報告は今年度に東京大学大学院人文社会系研究科に提出予定の修士論文制作の一環としてなされるものである。

## 10. 佐々木 淑美（日本学術振興会特別研究員）

### モザイクの劣化と材料・技法——ハギア・ソフィア大聖堂を事例に——

昨年のポスターの中で、発表者は、ハギア・ソフィア大聖堂モザイクの材料・技法に関する考察とそれに基づく制作年代の推定に向けた試みについて発表した。本年の発表はその続報として、特にモザイクの劣化に焦点をしぼる。ハギア・ソフィア内部に残る6~14世紀制作のモザイク群を考察対象とし、各モザイクでみとめられる劣化を要因ごとに分類し、それぞれの制作年代や場所による違い、また材料・技法との関係を考察する。

## 11. 佐藤 由季（大阪大学大学院）

### テアトロ・オリンピコと都市ヴィチェンツァ

ヴィチェンツァにある劇場、テアトロ・オリンピコには、遠近法を用いた立体的な書割が設置されており、そこには街路の様子があらわされている。本報告は、劇場が建設された16世紀当時における祝祭文化や都市イメージ等に注目し、都市の表象という文脈のなかで、この舞台装置の光景と同地の都市景観との関係を探るものである。そして、ヴィチェンツァ市民が有していた理想の都市像への意識を考察する。

## 12. 田島 篤史（関西大学大学院）

### 中世末期における検閲と『魔女への鉄槌』の出版

活版印刷術はその誕生直後から多くの作品を生み出しながら普及していった。一方で、時の権力者たちはこの新技術の重要性を認識し、出版統制に乗り出す。異端審問官インスティトーリスによって執筆された『魔女への鉄槌』も、この大発明の恩恵を享受した作品の一つであり、当該書籍の登場が魔女狩りを激化させたとも言われている。『魔女への鉄槌』は 1486 年の初版から 1520 年代までに 13 版が出版されたが、本報告ではこの出版統制揺籃期において、本書はいかにして検閲を通過し版を重ねることができたのかを検討する。

## 13. 武田 啓佑（早稲田大学大学院）

### 中世後期イングランドの王と楽師——君主鑑におけるその評価を中心に——

1960 年代以降、14・15 世紀における楽師(minstrel)の研究は王侯や都市の会計記録を史料とするものが主流となってきた一方で、当時の著述家たちの楽師をめぐる評価はあまり議論されていない。本報告では、14・15 世紀イングランドの王侯に読まれた「君主鑑」の著作群を手がかりとして、楽師とその技芸が王にとってどのような意義をもつものと認識されていたのかについて、12・13 世紀の諸著作にみられる批判的態度とも比較しつつ考察する。

## 14. 田辺 めぐみ（帝塚山学院大学（非常勤））

### 異文化教育における写本彩飾の可能性

中世の図像や装飾は、現実の世界や事象を写実描写したものではない。しかし写本の彩飾プログラムに認められる多様性や両義性、絵師の創意と写本注文主・所有主の意向の混淆等を複合的なアプローチから検討すれば、当時の社会や文化、さらには人のありようまでをも具体的に把握することが可能となる。本発表では、かかる考察に要する視座や方法論が昨今益々求められている異文化教育に有用であることを示唆したい。

## 15. 三浦 麻美

### “Doppelbiographie”としての『聖エリーザベト伝』

13 世紀末にドミニコ会士アポルダのディートリヒによって書かれた『聖エリーザベト伝』は、列聖審問関連の文書や既存の聖エリーザベト伝に加え、夫だったテューリングゲン方伯ルートヴィヒの伝記にも多く依拠すると指摘されている。本報告は『聖エリーザベト伝』中のルートヴィヒの描写に注目し、世俗諸侯としてのルートヴィヒへの評価を見ていく。そして聖人との関わりを通じて提示される俗人男性の模範像を考察したい。

## 16. 山中 良子（東北芸術工科大学／早稲田大学）

### イギリス中世の **seal bag**——カンタベリーに遺る絹錦——

19世紀後半に、カンタベリー大聖堂で 39 のシールバッグが見出された。その多くは毛織物が主産業のイギリスにおける希少な絹錦製であり、また錦の **seal bag** はイギリス以外では見出されていない。付けられたチャーターにより、バッグの制作期等が明らかになる事は、錦の貴重な資料であるのみならず、高度な技法を要する絹錦の存在が、さまざまな時代背景を物語っている。

本報告では the Society of Antiquaries of London（1934）及び Anna Muthessius（2008）による先行研究と、報告者の実地検証、研究を対比させその分析を進展させたいと考えている。